中外日報　記事原稿　20181202

　　**佛仙原坦山禅師を仰ぐ**

原坦山老師（文政2年～明治２５年、１８１
9～1892）のご生誕二百年が来年となりました。
　幕末明治期を代表する禅匠として、文明開化期
の東京帝国大学印度哲学初代講師や曹洞宗大学林
総監として更には佛教結社佛仙社の創立者と
して当時の仏教界を力強く牽引した類まれな
仏教者でした。

　本年は戊辰戦争・維新戦争百五十年という節
目。何かと往時を追懐する記事が散見されます。

　坦山老師については『坦山和尚全集』があり、
後学にとり大変有意義な書物であります。

　老師最晩年は曹洞宗管長や帝国学士院会員など
の栄誉に恵まれましたから世間の名声はずいぶん
高かったことでしょう。
　ところでその一生を概観しますと起伏に富んだ
劇的な生き方をされています。

当初、儒学を磐城平藩校施政堂（福島県）の大儒
神林復所（1765～1880）に学びます。復所は向学心の厚い根っか
らの学者で、「言志四録」で有名な江戸の佐藤一斎に学んだのです。
　その著書は三百部以上にもなります。彼は磐城平藩を
代表する学者でした。坦山は平藩士新井勇輔の長男として出生。

致仕した父に従い江戸へ上京したのは老師十五歳
のとき。湯島聖堂で官学を習得、頼山陽の三男坊
で幕末の志士・頼三樹三郎と交友を結び一時は
慷慨の士を目指したのでした。頼三樹は父山陽著「日本
外史」の出版に尽くし、当時の大ベストセラ－となり

尊王攘夷派からは聖典視された。

惜しくも３５才で安政の大獄で刑死。さて、坦山は

多感な若者でしたから、所帯をもつことになって

いた彼女が別の情夫とねんごろになっている様子
をみてあやうく刃傷沙汰になりかけたことも。

　やがて猛烈な勉学の成果もあがり、駒込吉祥寺
栴檀林の修行僧に儒学を教授するまでになり
ました。そこで大中京璨という禅僧と儒仏
論争をする羽目になります。京璨は関浪磨甎の弟子でしたから

分が悪かったと思います。この論争に負けたほうが
弟子になる約束でしたのであっさり兜を脱ぎ、
曹洞宗の出家僧となります。以来諸方の名だたる老宿

宇治興聖寺回天慧杲、浪花覚巌寂明、小田原月庵全龍の門を叩き、最終的に本高風外
（1779～1847）の印可を受けます。当時風外の会下
には後に間出の大禅師となる諸嶽奕堂（1805～1879）、「良寛道人遺稿」を
出版した蔵雲、学究肌の白鳥鼎三、無関など一級の禅僧たちが
犇めいておりました。坦山はその中でもずっと若輩でした。

　嘉永６年、ペリ－が黒船

で来航し、我が国を驚天動地させたのと同じ年に京都白河雲居山心性寺の首先住職となります。ときに３５才でした。結制もしました。その時の助化師は道友の環渓和尚で、
のちに永平寺を董すことになります。

江戸でもそうでしたが、京都では蘭方医の小森宗二と出会います。そして

「仏教で盛んに主張する心は一体体のどの部分にあるのかその証拠をみせよ」と論争となりました。とうとう小森の主張する解剖学的な根拠を示すことができず改めて医学的に
実験したうえで心の所在を確定できなければ、自分の信じる仏教が廃れてしまう。

　そんな危機感を懐いたのです。坦山のいう心性実験のきっかけはここに始まります。

その論争をしたところが海老屋という懇意にしていた法衣商でした。なんとその店の
息子が富岡勇輔（鉄斎）でした。当時まだ二十歳くらいの若造で大田垣蓮月尼の身辺の手伝いを
何くれとなくしていて、画家として一本立ちする以前のことです。

　宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花のしたふし

尼は高潔で無欲な風流歌人として知られており、そんなこんなで心性寺の坦山の
世話になり寺に同居したことがあります。陽明学者春日潜庵や梅田雲浜などの

勤王家との交流もありましたので尼は勤皇家と目された存在でした。
富岡家の先祖には石田梅岩の石門心学に傾倒した以直もおり単なる一法衣商

ではありませんでした。鉄斎が「万巻の書を読み万里の道をいく」という大抱負
を懐きながら生涯読書と南画に精進したのも所以無しとしません。

　さて小森との論争で西洋医学を学びなおすことを決心、仏教学
にも目を晒し、比叡山の羅渓慈本について天台教学を深めました。

そのときには蓮月尼と勇輔も一緒したのです。

一方、時の関白近衛二条公と衝突して狂人扱いを受け、精神病院にお預けになる
という悲劇もありました。その後、東山のあたりで浪人生活を続け
ながらも坐禅三昧に拍車をかけ、江戸にもどります。

　維新当時には大教院編輯課に在勤中でしたが出版
法の罪科を問われ還俗をさせられてしまいます。そのころでした。
坦山の徳望を慕う啓蒙思想家加藤弘之から帝国大学仏教講師の招請

を受諾、仏教学者としての道を歩みます。

儒者から出発し禅僧となりさらに還俗の憂き身にあい

ながらも己の信ずる実験的医学禅に邁進しつつ
教鞭をとり続けました。それらの成果は「時得抄」
の出版となり、各界の有識者へその批評を求めました。大脳生理学や解剖学の教養を駆使した論文は浄土宗の大徳福田行誡や同門の西有穆山からの批判も受けました。

坦山の教養は広くギリシャ哲学や欧州の哲学者ニュ－トン、デカルトにまで

及び、富永仲基「大乗非仏説」にも注目して共感しています。

福沢諭吉と面談し彼の知人の在日外人にまでも
批評を仰いでおります。著作に対する坦山の自信のほどがこちらにも
伝わってきます。

　老師は単身で西洋医学と禅の対決を進めついに
佛教結社である佛仙社の創設となりました。
　老師自筆稿本『大乗起信論両訳勝義講義』（昭和６３年功運寺刊）の序文に
中村元博士が次のように述べられています。

　　　ア－ラヤ識といっても、現代の学者は
ただ文句を解釈するだけではなかろうか？

　　　・・・『最尊勝の身と云ふのは脳にある
　第八識（ア－ラヤ識）の事です』と
言い切っている。・・・原坦山の体当たり
の解釈は、やはり考えさせるものがあるであろう。』

老師畢生の成果は法嗣の原田玄龍に受け継が
れその印可を受けた心霊哲学会主宰の木原鬼仏へと伝授された。

鬼仏著『身心解脱　耳根円通法秘録』（大正六年）の

題字は前永平寺貫主森田悟由禅師であり、
禅師は坦山の曹洞宗大学林葬の際、大導師
を務められたという深い因縁があります。

坦山禅ともいうべき医学禅は出家以前に

学んだ多岐安叔や湊長安による医学の影響を見逃す

ことはできません。

　多岐家は累代将軍家の奥医師を輩出し

た家柄ですし、湊長安はあのシ－ボルト

からドクトルと敬愛された蘭医でした。

　『惑病同原の実験』によれば坦山は瀕死するほどの重体

に三度あい、定力による奇病も発症するなど

勦絶このうえない辛酸をなめつくしておられます。

　思い返せば雲水をしていたころには尾張の山中で正光真人という仙人から仙訣を

うけております。そういえばあの白隠禅師にも仙人との出会いがありましたね。

　ところで交際の広さにも注目しておきたいです。

明治を代表する居士といえば老師の門下生で明治の維摩と尊敬を受けた

大内青巒居士、老師の盟友陸軍軍人・政治家子爵鳥尾得庵

居士、さらには山岡鉄舟居士ですが、いづれも
胸襟を開いた親密な交際がありました。得庵の「無量寿経論」にはみずから評注を

しました。彼は日本茶道学会の流祖でもあり伝統芸能術にも深い教養人。
　仏教講師時代の教え子だった哲学者井上
哲次郎をはじめ各界一流の要人たちに仏教
思想の魅力を堂々と広めた功績は多大でした。

　坦山の時代に先駆けた「心性実験」の講義
は当時の若きエリ－ト達に大きな知的刺激を

与えたことでしょう。

　最後に晩年の境涯を述べた七絶一首を
紹介します。

　　　野人本自不求名

　　　須向山中過一生

　　　莫嫌憔悴無知己

　　　別有煙霞似弟兄

　最晩年には保善寺（東京世田谷）で老の
身を養っておりました。いよいよと
いう最中の三十分前にみずから筆を把って
死亡通知書をしたため宗務当局や道友たち
に知らせたのでした。

　『拙者儀即刻臨終仕候間此段御通知及候也』

坦山老師はこうして七十四年もの波乱万丈の
生涯を安らかに閉じられました。

坦山老師生誕二百年の節目を一年後に控え、

一代の傑僧の面目を偲ぶとともにその顕彰
がなされることを期待するものです。